

剣風



事務局 〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
<http://www.saitama-kendo.or.jp>
(編集責任者 奥田昌利)

第10号 平成28(2016)年6月29日発行

(題字 前会長 野澤 治雄)



剣道精神で市政の舵取り

剣道教士七段 入間市長 田中 龍夫



剣道教士七段の市長が四人集まって稽古会を開催しました。春日井市で今年三月末に全国高校選抜に合せて実施した剣道市長稽古会で私も面を着けた一人でした。不思議なものです。縁もゆかりもないしかも秋田、静岡、愛知、埼玉からわざわざ集まり稽古し座談会をしたのですから。初めて会って竹刀を交え、心開いて市政について語る、昔からの友人のように。因みに稽古会に参加された方々は、伊藤太春日井市長、長谷部誠由利本荘市長、北村正平藤枝市長と、遠藤正明範士八段、渡邊香教士八段、東良美教士八段、佐久間陽子五段他の方々でした。

考えてみれば、剣道で助けられることがたくさんありました。剣道での縁、剣道で培った体力、精神力、考え方、そして、何よりも自分の生き方の主軸の形成も剣道からと自負しております。

兄の影響で剣道をはじめ、高校では埼剣連会長であります豊嶋正夫先生に出会い厳しい稽古と数々の薫陶をいただきました。あの頃の豊嶋先生の一言一言が今でも体に焼き付いております。二年生の時、関東大会に出場させていただき、三年生になって関東大会埼玉予選、インターハイ埼玉予選に選手として優勝させていただきました。しかし、本大会には選手から外れ辛い心持でマネージャー役として同級生選手のフォローに回りました。苦しい役割でしたが、今としては貴重な良き体験であったと認識しております。市内の中高生が市や県の代表に選ばれ市長室に訪れたときには「出場できなかった選手のことを思いなさい」とその時の経験を話してあげます。

市議会議員になってから、なかなか稽古の時間が取れずにいた頃、当時、入間市剣道連盟の滝沢寛夫会長が「早朝なら時間が取れるだろう」と毎週木曜日の朝六時半から数名にお声掛けしてくださり、稽古をつけてくださいました。六段に昇段したのもその頃でした。市議会議長になり県議になりさらに稽古時間が取れなくなってきたそんな時、滝沢会長が「剣道は面を着けるばかりが剣道ではない、政治家は常に心を鍛え人間性を高めているのだから、それも剣道の目指す修行なのだ」というようなお言葉をかけてくださいました。いつもその言葉に気を強くし、「剣道は肚だ、政治の世界は常に道場だ」と己に言い聞かせることによって剣道を続けて来られた気がします。ただ、いつでも剣道をできる体力だけは常に蓄えておかねばということで毎日、2キロの竹刀で100本の素振りと毎朝10キロのジョギングは欠かさないようにしております。

市政の話をさせていただきます。入間市長に就任以来、常に職員に言っていることがあります。「仕事も遊びも楽しくなければ面白くない。それには三つのことを心掛けなさい」一つは「自分だけが良ければよい、得すればよいという心を捨てなさい」二つ目は「わだかまりや偏見を持たないで純粋な目で物事を見なさい」三つめは「夢や目標目的を持ちなさい」と。人の笑顔を自分の幸せと感じられることが本当の幸せに通じることであり、目指すものがあれば、どんな我慢もまたどんな努力もすることができます。心にわだかまりがあると市民の求めていること、すべきことが見えてこない、まさに「打とうとも 我は思わず 打たじとも 我は思わん 神妙の剣」の極意、「明鏡止水」の心境で行政を行うことの大切さを説いております。

さて、市政推進にあたり、充実した生活ができる環境（行政の諸施策も含めて）があること、その一つとして、文化や芸術、スポーツで活躍できる体制があることも重要であり、埼玉県剣道連盟の果たす役割も大きな一役を担っていただいているものと認識しております。深く敬意と感謝を申し上げます。

恩師の豊嶋会長、県議時代にご指導いただきました奥田昌利副会長に乞われて巻頭言を書かせていただきましたが、これからも剣道の精神で市政の舵取りをしてまいる所存であります。

埼玉県剣道連盟の益々のご発展を祈念申し上げます。



稽古を終えた田中・長谷部・北村・伊藤各市長

「大会記録この1年」(2016年前期) 全国大会(上位)入賞結果・県予選会結果(報告)

順不同

【県高校新人大会＝H27・11・23、24】

▽男子団体 ①立教新座(須山、石川、波多野、中嶋将、森川) ②本庄一 ③浦和 ③城北埼玉

▽女子団体 ①埼玉栄(小沼、竜崎、河森、江藤、沢島) ②淑徳与野 ③本庄一 ③ふじみ野

【県中学新人大会＝H27・11・12】

▽男子団体 ①川口芝(下村、秋山、安藤、大城、清水) ②城北埼玉 ③越谷栄進 ③新座六

▽女子団体 ①春日部大沼(竜崎、松川、平吹、間野目、小川) ②吉川南 ③越谷大相模 ③久喜菖蒲

【第8回都道府県対抗女子優勝大会県予選＝

H28・4・10】

▽次鋒の部 ①辻本葵(上尾) ②宮沢(所沢) ③辻(朝霞) ③遠藤(久喜)

▽中堅の部 ①山村貴恵(春日部) ②工藤(東松山)

③志藤(東松山) ③下梶(高校)

▽副将の部 ①川崎和子(越谷) ②市村(朝霞)

▽大将の部 ①内野尚美(所沢) ②関口(浦和)

【第20回県女子選手権兼第55回全日本女子選手権県予選＝H28・5・21】

▽準決勝

村山千夏(県警)メコー 岡崎愛美(戸田)

志藤綾子(東松山)メー 辻本葵(上尾)

▽3位決定戦 辻本メー 岡崎

▽決勝 村山メー 志藤

【健康福祉祭交流大会県予選＝H28・4・10】

▽60歳以上65歳未満の部 ①橋本勉(久喜) ②長谷川(越谷) ③加藤(川口) ③小川(西入間)

▽65歳以上70歳未満の部 ①下川龍二(久喜) ②半田(鴻巣) ③菅村(春日部) ③甲村(北本)

▽70歳以上の部 ①福田健治(入間) ②日高(越谷)

③宅島(川口) ③小能(越谷)

【第25回県高齢者大会＝H28・5・21】

▽60歳以上65歳未満の部 ①伊藤徳男(春日部) ②小川(西入間) ③加藤(川口) ③橋本(久喜)

▽65歳以上70歳未満の部 ①下川龍二(久喜) ②栗原(西入間) ③甲村(北本) ③山中(北本)

▽70歳以上の部 ①小川博孝(行田) ②下川(久喜)

③小能(越谷) ③若林(東入間)

【第64回都道府県対抗優勝大会県予選＝

H28・1・31】

▽次鋒の部 ①泉和毅(北本) ②川上(北本) ③田中(北本) ③柳沢(加須)

▽五将の部 ①水森大貴(東松山) ②奥島(東松山)

③石川(東松山) ③竹越(川口)

▽中堅の部 ①木野内悠介(上尾) ②小野(高校)

③猿橋(小川) ③中山(本庄)

▽三将の部 ①足立柳次(県警) ②嶋田(県警) ③田島(県警) ③渡辺(県警)

▽副将の部 ①橋本桂一(東松山) ②矢口(川越)

③吉田(北本) ③稲川(蔵)

▽大将の部 ①金田孝行(県警) ②金子(高校) ③菊地(高校) ③原(高校)

【第64回都道府県対抗優勝大会＝H28・4・29】

▽2回戦 埼玉4－1兵庫

▽3回戦 埼玉1－1秋田(本数勝)

▽準々決勝 埼玉3－1広島

▽準決勝 埼玉3－2大阪

▽決勝 埼玉1－1愛媛(代表者戦勝)

【いわて国体県予選＝H28・5・29】

▽男子先鋒の部 ①精松慎治(県警) ②水森(東松山) ③阿部(県警) ③長峰(北本)

▽同次鋒の部 ①嶋田貴文(県警) ②篠田(県警)

③足立(県警) ③西田(川越)

▽同中堅の部 ①橋本桂一(東松山) ②米屋(県警)

③東永(県警) ③斉藤(高校)

▽副将の部 ①井口清(県警) ②菊地(県警) ③中谷(川越) ③徳村(県警)

▽大将の部 ①上野光弘(川口) ②大澤(県警) ③原(高校)

▽女子先鋒の部 ①山村貴恵(春日部) ②内野(所沢) ③小林(久喜) ③萩原(越谷)

▽同中堅の部 ①本郷利枝(高校) ②川崎(越谷)

③二瓶(越谷) ③山下(本庄)

▽同大将の部 ①村山千夏(県警) ②市村(朝霞)

【第4回埼玉県杖道大会＝

H28・6・12, 埼玉県立武道館】

▽個人の部 基本の部①金旻燦(埼玉大学) ②小本喬(東入間支部) 初段の部①加子晏楓(大宮武林会) ②神崎士龍(埼玉大学) 二段の部①青木四郎(久喜杖道会) ②後藤かおり(埼玉大学) 三段の部①畑山良一(大宮杖道会) ②石原仁道(浦和杖道会) 四段の部①杉崎利春(久喜杖道会) ②江口佳寿美(久喜杖道会) 五段の部①永井順子(埼玉杖神会) ②並本大介(所沢杖友会)

▽団体の部 ①久喜杖道会 ②東入間支部

【第63回関東高校剣道大会＝

H28・6・11、12 小田原】

▽女子団体 第3位 本庄第一

▽同個人 第3位 嶋田莉子(本庄第一)

平成28年4月29日、大阪府立体育館で開催された第64回全日本都道府県対抗剣道優勝大会において、埼玉県が26年ぶり4回目の優勝を果たすことができました。この結果が残せたのは、大会で好成績を期待する埼玉県剣道連盟の絶大なるご支援、そして、山中茂樹公二部会長を始めとする強化委員の先生方の熱意あるご指導と、選手の努力、さらには大会当日大阪まで応援に駆けつけて頂いた大勢の選手のご家族、指導者、関係者の皆さんのお陰と監督として心からお礼申し上げます。

今回の4回目という優勝記録を大会の歴史から振り返ってみると、大阪府の15回、東京都の12回、福岡県及び熊本県の5回に次ぐ全国で5番目の優勝回数を誇る県となります。大会の開会式で全日本剣道連盟副会長兼専務理事の福本修二先生が「この都道府県大会は、先鋒が高校生、次鋒大学生、そして職業別、年齢別等のチーム構成からしてまさにその都道府県の剣道の実力を示す大会であります。」と挨拶の中で述べておりました。ですから今回の優勝は埼玉県全体の層の厚さ及び全国的にも上位に位置する剣道レベルの高さを示すことができたのではないかと考えております。

さて、今回の大会全般について振り返って見たいと思います。今年の選手は、先鋒曾田俊平選手（本庄第一高校3年生・インターハイ団体ベスト8）次鋒泉和毅選手（順天堂大学4年・全国高等学校剣道選抜大会優勝）5将水森大貴選手（伊田テクノス・全日本学生剣道大会団体優勝）中堅木野内悠介選手（吹上小学校教諭・全日本学生剣道大会団体3位）3将足立柳次選手（県警・全国警察剣道選手権大会個人5位）橋本桂一選手（伊田テクノス・全日本剣道選手権大会ベスト8）大将金田孝行選手（県警・全国警察剣道選手権大会3位）とそれぞれの選手が全国を舞台に活躍してきた実力のある選手で構成されました。この選手構成を見た皆さんからは「今年のメンバーはいいね。」「このメンバーなら上位の結果が期待できるね。」と前評判を例年以上にいただきました。監督としては嬉しい反面その声を聞くたびに責任の重大性を感じ、日々、どうしたら最高の結果を選手が残せるだろうかを考える毎日でした。余談ですが、大会の事を考えるあまり、通勤の定期を自宅に置き忘れたり、本来降りるはずの駅を乗り過ごしたり（飲んで乗り過ごしたのではありません）と頭の中は大会の事ばかりでした。その中で監督として決めたのが試合だけでなく大会に向けての強化も悔いの残らないようにやろうということでした。そして取り組んだのが選手同士のコミュニケーションを図る事でした。

都道府県大会の選手構成は職業別等、幅があるのと、更には普段顔を合わせたことのない者同士です。チーム内の選手の人柄やその人の得意としている技もある程度知らないようでは、一人ひとりが繋げる試合ができるはずもなく、また、チーム内の応援にも影響が出てきます。試合中この人はこの間合いに入ったらこんな技が出る等、概ねわかっていれば、待っていましたとばかりに拍手の



写真提供＝剣道時代

応援に熱が入ります。そんなコミュニケーションを作るため行ったのが例年より多く強化合宿訓練、そして、月例稽古での訓練、一般の道場への出稽古の機会を増やしたことでした。選手のみなさんは家庭、仕事、学校等何かと用がある中で積極的に都合をつけて参加してくれました。お陰で2回実施した強化合宿訓練では選手全員が揃い目的とした選手同士のコミュニケーションを確実に図ることができました。

また、第1回目の強化合宿訓練では、栃木県の都道府県チームが遠征に来てくれ合同で訓練ができたことも効果の上がる充実した合宿となりました。

次に監督として選手に指導したことは、

①選手同士が繋げる試合をすること。

②ギリギリまで攻めて打ち切ること。

③試合時間内気の充実を保つこと。

この3点を重点に徹底して指導してきました。本大会ではそれを見事に実践してくれました。初戦の兵庫県とは、先鋒、次鋒が連勝後5将から3将まで1敗2分けと五分になりかけたところで副将、大将がきっちり締めくくりました。次の広島戦では先鋒から5将まで1敗2分けとなったところ中堅から連勝して逆転勝利。準決勝の大阪戦ではまさにシーソーゲームとなり先鋒、次鋒が勝利、5将中堅で追いつかれ3将で勝ち越し大将で決める試合でした。決勝では副将まで1勝1敗、大将が代表戦で相手大将を撃破して優勝に輝きました。今回の戦いぶりを振り返るとまさしく瀬戸際の攻防戦で、どの試合一つとっても誰か一人でも負けたらチームは敗退していたのです。今回優勝することができたのは、選手一人一人が試合を繋いでくれたことにほかなりません。また、捨て切った思い切りの良い技で勝負をしてくれた試合展開は次の選手に勇気を与え、試合を盛り上げてくれたことも勝利の要因だと思います。

私は、目の前で素晴らしい試合を展開してくれている選手を見て、まだ準決勝だというのに涙がこみ上げてきました。そして優勝を決めた瞬間は、感無量で本当に言葉が出ませんでした。閉会式が終了し応援席からご家族や指導者の皆さんが試合場に下りてきて選手とともに喜んでいる姿を見た時が、監督としての肩の荷が下りた瞬間でした。今回の大会は本当に選手全員で勝ち取った大会と感じました。

最後になりますが、強化合宿、出稽古等絶大なるご支援を頂いた剣道連盟及び関係する各先生方にお礼申し上げますと共に、選手に対し「おめでとう」と、心から言いたいと思います。感謝

— 金田孝行大将のコメント —

3年連続の大将での出場でした。過去2回は1回戦敗退。あの悔しさを今回は味わいたくない。まず1勝したい、それには7人の心をつにしたいという思いがありました。

今回まさに監督、選手が丸となって大会に臨む事ができたのは、埼玉県剣道連盟の作って下さった他県よりはるかに恵まれた環境があったからだと思います。監督からは、きめ細やかな指示と気配りをしていただき、皆思う存分試合に専念することができ、それが優勝という大きな結果に繋がったと思います。

私自身これまで全国規模の優勝、入賞という経験はありますが、常に誰かのおかげ、チームの一員にすぎなかったのですが、今回は代表戦を制することができ、自分の使命を果たせた満足感でいっぱいです。

そして今回家族全員が初めて応援に来てくれました。その前で、いつも通りの自分が出せ、良い結果が残せたことを嬉しく思っています。

「我が師を語る」—範士九段 佐藤 顕先生—

剣道 教士七段 松本 泰昌（昭和34年度卒業）



佐藤顕先生



佐藤顕と言っても知る人も少なくなっていると思うので、簡単に紹介したい。先生は福島県会津の出身で旧制会津中学から国士舘専門学校に1期生として入学、斎村五郎先生、小野十生先生をはじめ多くの先生の指導を受けた。卒業後、福岡の八女中学校、さらに旧制浦和高等学校に剣道の教員として勤務、その後、学制改革で新たに旧制浦和高等学校と埼玉師範が一緒になってできた埼玉大学に体育教員として勤務された。私が埼玉大学に入学した

今から60年前、昭和31年（1956年）当時は、昭和27年の剣道復活から日も浅く、大学でも剣道部があるところはまだ少なかったのではないと思う。埼玉大学も例外ではなく、剣道部はまだなかった。私は高校時代やっていた水泳部に入部したが、入学して2か月ほど過ぎた6月のある日佐藤先生から体育教教室にくるようにとの呼び出しがあった。そこでの先生の最初の言葉は、「お前水泳をやっているオリンピックにでられるか」ということだった。もちろんそんな力は全くなく、夢にも思っていない私は、将来は水泳の指導者になりたいという先生は腕組みをしたまま

しばらく無言でいたが、やがて「剣道はこれから必ず大きく発展する、だから剣道部を創れ、ついては自分では剣道の経験はないが剣道部を創りたいと言ってきているお前の1年上の学生がいる、彼と話しあって剣道部を創れ」ということであった。私自身剣道は父親の手ほどきで、水泳のオフシーズン（当時は室内プールではなく水泳部の活動は4月から9月までだった。）に月に2～3度近隣の剣道愛好者と一緒に我が家の庭先でやっていた程度である。しかし、私は素直に先生の言うことを聞き、紹介されたその先輩と会って剣道部創立について話し合い、参加者を募集し、10名程度の部員で剣道部が発足した。経験者は、初段の中野茂先輩（春日部高校出身、現越谷剣道連盟所属）と、多少の経験のある私の2人、あとはすべて未経験者である。剣道部はできたものの学内に練習の場はなく、佐藤先生が当時県庁の近くにあった武徳殿を週3回使わせてもらえるように計らってくれた。先生も時間のとれるかぎり指導してくれたが、その指導は、「剣道は実践である、稽古をかさねることである、それ以外に強くなる方法はない。」ということで、細かい技術的なことは言われず、気力で相手にぶつかっていく、思い切って面を打っていくことだけを指導されたように思う。先生は身長170cm少しだが体重は100kg近い巨漢である。また先生の剣道は、「気の剣」といわれるように、多彩な技を繰り出すのではなく、相手を気で攻め、面に打ち込む、相手が打ってきた面をすりあげて面を打つ、または出小手を打つ、多分この3つくらいで、そのほかの技を出したのを、あまり見たことはなかった。先生からは時々、国士舘専門学校時代の話聞いたことがあるが、斎村先生はまさに大木で、いくら打って行っても何をしても全く動じない、しかし、苦しくても打ちかかっていくしかない、そんな毎日だった。そういう稽古の中で、斎村先生はわれわれの気持ちを鍛えてくださったのだと思う、というようなことも話された。当時の私には、先生が斎村先生の教えから感じ取ったところまではわかりようもなかったが、先生との稽古で私が感じたのは、先生は体の大きさもあるが、本当に大木のようなものであったということだった。先生に稽古をお願いすると、ウーウーとうなり声をあげて攻め込んでくる、その圧力に耐え切れず下がる、次の瞬間ドカーンという感じで面を打たれる。元に戻ってもう一本、同じように攻められる。どうにもならなくなって、苦し紛れに面を打っていく、するとすりあげて面を打たれる、あるいは出小手を打たれるで1～2分しかもたず、地稽古とはいっても、内容的にはほとんど、かかり稽古であった。私は卒業後高校の体育教員を目指すことになったが、先生からは指導者としての心構えとして、「剣道は師が自分の生身を打たせて教えていくものである」ということを忘れないで、決して楽をした指導をしてはいけないと言われた。またその他にも「剣道は情だよ、情のわからない剣道はだめだよ。」「剣道は武士の表芸である、だから美しく品がなければならない」これらのことばを折にふれて聞かされた。その頃は剣道について深く考えることもなく、なんとなく聞き流していたが、このことはただ打った、打たれただけの剣道ではだめだということを教えていたのではないと思う。私が大学で先生の指導を受けたのは先生の40歳代後半から50歳過ぎと先生もまだ若く、学生との飲み会にもよく参加された。また皆で大学の近くにあった先生のお宅まで押しかけることもあった。剣道については厳しい先生であったが、そういう席では斗酒なお辞せずで、興がのると当時流行っていた「アカシヤの雨」という歌をよく歌った。ただし先生の歌は会津訛りなのだろうか「アカスヤの雨」だった。



部創設時の大会出場選手

「少年剣道育成強化…実践事例シリーズ②」

川越市剣道連盟

川越武道館少年剣道の育成

少年剣道指導者 星井 謙司

本少年部は、昭和40年頃に発足した「少年剣道教室」を引き継ぎ、昭和49年、川越武道館の完成を期に、「川越武道館少年部」として現在に至っています。当時の指導者の中心者は、初代館長、北村博學範士です。以来、今日まで、50余年の伝統ある剣友会です。平成27年度の会員は、少年部男女38名、中等部20名が所属し、川越武道館を主たる剣道場として稽古しています。

1 少年部の稽古始め

毎年、1月1日を「元旦稽古」と称し、午前8時30分から約1時間の稽古が始まります。集合の写真撮影後、少年部、中等部、指導者を含め、40名程の合同稽古となります。稽古に励む少年部の熱気が凍てつく床から伝わってきます。稽古終了後、見守って頂いた父母の方々と共に、近くの川越氷川神社、三芳野神社を参拝し、1年間の稽古の無事と剣道上達を祈願します。元旦稽古は、少年部の心身の鍛練の場として欠かせないものとなっています。



2 少年部剣道育成の指針

毎週、水、金、日の3日間、約1時間の稽古を基本としています。指導者は9名、曜日によって指導者は変わりますが、全剣連「(幼少年) 剣道指導要領」、同教本を指針としています。剣道の基本的な動作や作法を正しく身に付けさせることを共通理解し、稽古の基本としています。その中でも「切り返し」を基本動作の総合的な稽古法と位置付け、指導時間の確保と効率的、合理的な指導法の工夫に取り組んでいます。

また、少年部は学年の差異もあることから、教えをうまく表現する難しさはありますが適宜、理解できるよう指導しています。また、上級生が下級生の世話をするなど、リーダーシップが発揮できるよう努めています。上級生と下級生相互の人間関係、個々の自立心、社会性を高め、一体感のある少年部の育成を目指して取り組んでいます。

3 父母会との連携・協力

稽古の内容、方法は指導者に一任されていますが、年間を通して円滑な稽古を継続していくには、父母会との連携、協力は欠かせません。少年部の組織、年間行事計画は、少年部の総会によって決定されます。総会は、独立し、主体的に運営されています。通常の稽古の見守り当番から、稽古始め、暑中稽古、稽古納め（餅つき、豚汁の振舞い）、少年部内の昇級審査会、秋の大会、卒業大会等、多岐に渡り、毎年計画されています。父母会は、その準備と協力を惜しむことはありません。それは、指導の強化にも繋がっています。指導者も父母会の我が子に託す思いを十分に受け止め、父母会の期待に応えられるよう誠心、誠意、指導にあたっています。

おわりに

本稿は、「少年剣道育成の強化」として、川越武道館少年部の指導の一端をまとめたものである。指定されたテーマの背景には、少年指導の現状と課題があるに違いない。それを推測するも、「少年剣道の強化」と少子化における「少年剣道の育成（剣道好きな子を育てるの意）」は表裏一体ではない。本少年部川越武道館少年部は、児童を中心に据え、正しい剣道の技術を習得させ、心身共に健全な人間を育成することを目的として、今後も取り組んでいきたい。

川越旭町剣友会のあゆみ

会長 西 秀信 運営委員長 吉野 圭子

～当会は、昭和43年12月から47年余りにわたり、健全な青少年の育成を目的に活動しており、市内外の剣道大会並びに昇級・昇段審査において、数々の実績があります。平成16年には全日本剣道連盟会長から「第1回少年剣道教育奨励賞」をいただきました。

剣道は剣道具を着用し竹刀を用いて一対一で打突し合う運動競技種目と思われがちですが、稽古を続けることによ

って心身を鍛練し、礼儀作法を身につけ、素晴らしい人間をつくりあげることが目的とする武道です。一緒に剣道やりましょう～

これは創設者の故・澤田良夫先生が、当会会則にある「旭町剣友会は、剣道の修練を通じ会員の正しい礼儀作法の習得と、体力の充実、向上を図り、健全な青少年の育成及び会員相互の親睦を旨とし、併せて明るい街づくりを通じて地域社会に貢献することを目的とする」をもとに書いた当会ホームページに挨拶文として掲載している言葉です。

現在中学生以下30名一般20名の普段の稽古は、指導委員長の指導を中心に、指導委員の誰が指導しても同じ目標を達成するよう徹底しています。時によりメニューは変わりますが、特に呼吸法に注意した正しい切り返し、左右の面を直接打たせ手の内を実感するなどの基本を重視し、応じ技・仕掛け技の稽古では互いに決められた本数が終わるまで縁を切らず緊張状態を作る意識をもつなど実戦を意識し、元立ちの難しさも実感しながら掛け稽古・地稽古に至るまで共に汗を流します。月に2回は形の稽古も行い、当会級審査会を10～4級として年2回行います。夏休みに秩父での2泊3日の合宿では、所作の美しさや防具の着装を競う試合も行っています。

地元川越の三道大会・市民体育祭・北村杯・ライオンズ大会では毎年実績を積み、福島県棚倉町との親善試合にも参加させていただいております。埼玉県剣道大会には川越代表選手が選出されてきました。市外の大会参加として松山剣道大会、毛呂山剣道大会、鶴ヶ島剣道大会、三芳町けやきカップ、所沢松井剣士会錬成会には毎年ご招待をいただき感謝いたしております。過去には明治神宮剣道大会、大井町剣道大会、日高市剣道大会でも数々の実績を残させていただきました。

12月には発会記念大会を開催し、個人戦と全員での紅白戦を行います。5年に1度はお世話になっている剣友会を招待試合にお招きし、記念誌「あゆみ」を創刊しています。記念誌に寄せられた先生方の話によると、発会前の経緯は昭和41年頃から当時の大東文化大学剣道部の合宿所が近隣にあり、当時学生の、今は大先生になられている方々にも手ほどきをうけ剣道を学び、運営資金を得るためには粉石けんを斡旋するなどのご苦労があったようです。会旗は当時の大東文化大学剣道部より贈呈されたもので、剣心の文字とともに現在も大切にに使わせていただいております。

今年は48周年となり2年後に50周年記念を迎える準備をすすめておりますが、地域親睦のために創設された一剣友会がここまで存続できたことは一期一会、多くの先生方にご指導賜ったことと感謝し、澤田良夫・法子夫妻を軸とした先人の先生方による活躍に恥じぬよう邁進していきたいと思っております。



新八段紹介

八段昇段にあたって



菊地 博之（県警察学校教官）

私は、八段審査受審資格の2年前から警察学校勤務となり、剣道の基礎と基本を見直す機会ができました。

今までは漠然と行っていた基礎、基本を学生と同じ気持ちで初心に戻り、一からやり直そうと思ったのです。すると、今までにないものが見えました。

まず、剣道の土台は構えです。土台がしっかりしなければいけません。肩甲骨を意識し、あごを引き、首を剣道衣の襟につけ、左足、左腰、左手を意識し、いつでも打てる構えを作ることを心掛けました。

次に、打突です。遠い間合いから氣勢（声）、攻め（一足一刀の間に入る）、高い評価の打突、ということを繰り返しました。高い評価の打突とは、相手がのけぞったところに打っていく面であり、打ち切る、打ち抜けることです。また、小手、面、胴、突き、どの部位に対しても同じように、氣勢、攻め、高い評価の打突ができるように心掛けました。これを行うことによって、審査の中で相手によって変わらない自分が作られたと思います。稽古の中では、中学生、高校生、一般と、どのような相手であっても、中心の攻め合いから相手を崩し、相手が出てくれば出ばな技や応じ技、居つけば仕掛け技で対処するようにしました。

審査に対する取組みとしては、私は埼玉県剣道連盟主催の八段講習会に3回参加しました。特に3回目の講習会は、2月20日、審査当日の8日前です。その時の1回目の立ち合いは、自分でうまくやってやろうとの考えから、先生方からの評価は、「充実した気持ちがない、剣先の攻めがない」と指導をいただきました。2回目の立ち合いは、指導を受けた点に注意するとともに、普段どおりに行うことを意識しました。すると、高評価をいただき自分への自信につながりました。審査当日は、「この前の講習会と一緒だ、自信を持ってやろう」と、若干の緊張感と充実した気持ちで受審することができました。

雑誌に、ある八段の先生の対談があり、『次があるから、もうあきらめようという気持ちでは、受かるはずがない。これが最後だと腹をくくって審査に臨みました。』とありました。私にとって審査当日、2月28日は46歳の誕生日であり、もう二度と同じ日は来ないという思いから、腹をくくって審査に臨めたと思います。また、3年前に注文した剣道具が、ちょうど審査の2か月前に最高の形で完成し、自分の受審する気持ちをあと押ししてくれました。

今後は、自他ともに認められる剣道家を目指すとともに、少しでも剣道界に恩返しができるよう貢献していきたいと思っています。

八段昇段にあたって



藤田 利美（県警特練監督）

この度、御蔭様で昇段することが出来ました。これもひとえにここまで育てて頂いた埼玉県剣道連盟をはじめ日頃から指導して頂いた先生方の御蔭です。この場をお借りして御礼を申し上げます。

正直、昇段出来たことが今でも信じられず夢ではと思う時が多々あります。しかしこのような場を設けて頂き僥越ではございますが私の思いを述べさせていただきます。

冒頭にも述べましたが昇段出来たのも私が剣道を始めた小学生から現在まで指導して頂いた先生方の御蔭であります。また私の剣道を見守りかつ応援してくれた両親や家族には本当に感謝しています。

そういった中、私が審査に向け日々気を付けていたことは先生方に指導して頂いたことを出来るようにすることのみでした。しかし当然そんなに簡単に出来る訳もなく私自身痛感したことは自分で良いと思い行ってきた剣道や考え方をまず改めないと昇段は難しいということでした。しかも改善出来るまでには相当な年数を擁し、もしかしたら出来ないのではという弱気な気持ちも正直ありました。しかし私のために指導してくれる先生方、応援してくれる両親や家族に対しそんな気持ちでは申し訳なく、自分なりに根気強く稽古をしてきたつもりではあります。

また、昇段するにあたって大変勉強となったことが2つあります。その1つは毎年奈良県で開催されている中堅剣士指導者講習会に参加できたことです。私は一度40歳の時に参加させて頂きましたが46歳の年に再度参加できる機会を頂きました。肉体的には厳しいものでありましたがそれ以上に範士の先生方に稽古をつけて頂き、かつ個別指導も頂けたので勉強になりました。もう1つは埼玉県剣道連盟が開催してくれる八段講習会です。範士の先生方や八段の先生方から個別に指導を頂けるのですが実際の審査形式で実施するので本番のつもりで行うことが出来ましたし、その後、先生方から稽古もつけて頂けたのでそれが今回の昇段に大変役に立ったのではないかと思います。

以上昇段にあたってということで述べさせて頂きましたが生涯剣道を今後も目標にして剣道の修練に励むとともに、少しでも埼玉県剣道連盟発展のためにお役に立てればと頑張る所存でありますので今後とも御指導、御鞭撻をお願い申し上げ結びとさせて頂きます。本当にありがとうございます。

八段昇段にあたって 永松 教孝（越谷支部）



この度、5月2日京都の剣道八段審査会に於きまして、昇段することが出来ました。これも偏に、（公財）埼玉県剣道連盟の豊嶋正夫会長を始めとします多くの先生方、諸先輩、同輩、後輩等の皆様方のご指導ご支援の賜と心から感謝申し上げます。

さて、僥越ですが、審査当日の状況等を述べさせていただきます。

まず、私は、ここ数年、左膝の半月板やふくらはぎの肉離れ等を起して満足な状態での審査が出来てなく、体調管理に気を付けたのですが、またも、3月にぎっくり腰になり、失望しかけておりましたが、ただ、周囲の皆様も万全な状態の方は少ない状況で臨んでおりましたので、気力で行けばどうにかなるという強い決意で臨みました。

また、剣道を始めたのが高校からで、早期に椎間板ヘルニアになり、2年からは生徒会活動等の方が忙しく、大分の高校時代は初段も取れないような運動音痴でもありました。大学でも行わなく、22歳から勤務先の日本住宅公団（現UR都市機構）の同好会で再開し、25歳から日本武道館の武道学園に学んだ人間で何の実績もなく、約40年間のサラリーマン生活で20年間以上は、深夜の12・1時頃の帰宅で

5時間睡眠が日常の状況でしたので、審査会場で全日本クラスの方等に会うと何時も気後れをしていました。

しかし、今回は、若い頃武道学園で教わった小森園・岡・中村毅・太田忠徳他の先生方から、君たちは次の世代に本物を伝えなければならないと常に指導頂いておりましたので、その言葉を胸に、既成観念を打破し絶対に合格するという気概で臨みました。

幸い当日は、寒がりの私には適温の暖かさで、膝腰痛も少なく平常心で立合ことが出来ました。その時に感じたことは、審査は自分一人の力だけではなかったということ。

特に、このところの埼玉県また、越谷の躍進が、追い風の如く、私の後ろを押してくれ、更に約30年間ボランティアとして地域の子供達に、特に私に似た不器用な子供達が多い道場ですが、その子供に工夫と継続を推奨してきました、その道場の子供達や保護者等の気持ち等が、目に見えない風となって後押ししてくれたように感じております。

結びに、現八段の先生方には遠く及びませんが、少しでも近づけるよう、精進して参りたいと存じますので、皆様方には倍旧のご教導、ご鞭撻をお願い申し上げまして、御礼と審査の状況報告とさせていただきます。誠にありがとうございました。

八段昇段にあたって 保坂 武志（高体連支部）

この度、5月2日に京都市で行われました、剣道八段審査会において合格させていただくことができました。これもひとえに、これまでご指導いただいた諸先生、先輩、剣友の皆様のおかげと心から感謝しております。

私の八段審査への挑戦は、平成22年11月の東京審査から始まり、今回の審査で13回目、2次審査は6回目でした。今までの審査でも毎年1回は1次審査のほうは合格していたのですが、2次審査になると相手のことを考えずに自分勝手な剣道になってしまう傾向が多くあり、そこを反対に打ち込まれてしまい相手が合格するということがありました。今回は今までの審査に比べて自分でも落ち着いた精神状態で臨むことができ、1次、2次審査で4人の相手と立ち合いを行ったのですが、すべての相手の動きがよく見え、その動きに対応することができ、相手を攻めてから動かし、そこをとらえることができました。今まででも一番良い立ち合いができたように思います。

この6年間で特に意識をして取り組んだことは、毎日の生徒との稽古の中で基本稽古、地稽古で、いかに正しい姿勢で打突の機会をとらえるか、また、体の切れのある体さばきで次の動作に移るかということを考えて行いました。また私は、高校の教員ということもあり、多くの大会に出場する機会があり、その後の先生方の稽古会でいろいろな先生方からご指導をいただきました。その結果が今回の合

格につながったのではないかと考えております。そして私は幸いなことに多くの八段の恩師にも恵まれ、本当に様々なことを学ばせていただきました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。

今後は、私自身も剣道八段として剣道の奥深さを求めて一層精進していくとともに、生徒たちが日本一になれるよう指導をしていく所存です。今後とも、何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

居合道八段昇段にあたって

小宮山克巳（居合道支部）



このたび、5月3日に京都武道センターで行われました居合道八段審査会におきまして、はからずも居合道八段に合格させていただきました。

埼玉県剣道連盟豊嶋会長をはじめ諸先生方から暖かい御支援をいただき、また、居合道部顧問の渡辺秀雄範士、山崎誉範士をはじめ多くの先生・先輩方からご指導を賜ると共に、居合道部の仲間からご声援をいただき、心より感謝申し上げます。

私は平成15年秩父市で行われた第38回全日本居合道大会に六段の部で出場させていただきました。井上巳代治監督の下、県内外の多くの先生方からご指導を賜り、小野澤隆一先生、柳川淳先生と共に団体・個人ともに優勝させていただいた経験が、今の自分の居合道に繋がっていると思います。

そして昨年は、福岡県で行われた第50回全日本居合道大会で七段の選手として選ばれ、強化委員長の山崎先生、佐藤忍部長、小野澤監督をはじめ多くの先生方の御指導を受け、準決勝まで勝ち上がったことは、今回の八段受審に向けて大きな弾みとなりました。

審査を直前に控えた4月、人事異動で上尾市教育委員会生涯学習課長職を拝命することとなり、時間外や土日出勤が多く、自分の思うような稽古が難しくなる中で、師匠山崎範士、三日尻幸治八段、鈴木勝雄先生をはじめとする同門の諸先生方より審査直前まで直々にご指導を賜り、また、仲間たちからも声援をいただき、絶対に合格しなければ、という不退転の気持ちで、当日の審査に臨みました。

八段に合格して振り返ってみますと、多くの方々と、道を通じた御縁で今日まで居合道を続けることができたことに感謝する気持ちで一杯になりました。

自分に学ぶ道が有ることを素直に喜び、生涯を通じて継続できる居合道こそ、「生涯学習・生涯練磨の道」という信念を持ち、自分の稽古のみならず、後進への指導に際しても、道の御縁を大切にしながら、日常即居合道の気持ちで努力精進して参りますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどを御願ひし、皆様方への御礼並びに昇段のご挨拶とさせていただきます。

編集後記

『剣風』第10号をお届けいたします。本誌は年2回発行ですから、創刊以来5年を経過したことになります。お蔭様で埼玉県剣道連盟広報誌として定着しつつあるといえるようです。今号は編集の最終段階で嬉しい便りが届きました。第64回全日本都道府県対抗剣道優勝大会で、わが埼玉が決勝戦で愛媛を破り、26年ぶり4回目の優勝を果たしたのです。さっそく大澤規男監督に優勝の喜びを記事にいただきました。また、今年に入って剣道八段審査では2月に菊地博之、藤田利美両教士が、5月には保坂武志、永松教孝両教士が相次いで合格。加えて居合道八段審査でも小宮山克巳教士が合格され、一挙に5人の八段が誕生する快挙となりました。広報部会では急遽ページ内容を変更して喜びの記事に切り替えた次第です。

（尾崎）